



## わたしの作詞用紙 来生えつこ

一九七六年に、弟（来生たかお）がデビューし、彼の曲に歌詞を付けていた私は、自動的に作詞家ということになった。その頃の私は、小さな出版社勤務のち、フリーのライターをしていた。

デビュー近く、ディレクターへ歌詞を持って行く際、音楽界の事情もわからず、少し悩んだ。大学時代から、遊び半分に歌詞は書いていたが、ノートだったりレポート用紙だった。しかし、レポート用紙では失礼かと、四百字詰め原稿用紙にモンブランの万年筆で清書したものを持っていった。

ある時、所属事務所で、その清書をしていたら、アイドル歌手の女の子が、不思議そうな顔で、「いつもそうやって書くのですか?」と、聞いた。

なぜか、すごく恥ずかしかった。作家でもないのに、原稿用紙にモンブランでもながるうと、自分でも思い始めていた。「そうよねえ、そう思うよねえ」と、言っしかなかった。若い女の子たちの丸文字が話題になっていた頃で、彼女にとっては、縦書きの原稿用紙ということ自体、不思議だったのだ。それをきっかけて、原稿用紙はやめた。一曲分の詞は、四百字詰め原稿用紙一枚で収まらないし、楽譜は左から右へ流れていくものだから、やはり横書きがいいのではないかと思っていた矢先だった。

のち、楽譜と同じように、左から右へ流れて読めるような作詞用紙を、印刷屋さんにいる友人に作ってもらった。罫線が、見開きで左ページと右ページに、五線線と同じように並んでいるものである。

八十年代半になると、ワープロを使うようになったが、やはり清書は自筆でないと思われ、その作詞用紙に書き直していた。

が、歌詞というのは、「コピーされていろいろな人の手に渡る。ディレクター

来生えつこ(きずき・えつこ) 1948年、東京都生まれ。女子美術短期大学卒。出版社で編集者として勤務。弟・来生たかおのデビューとともに作詞家に。77年「マイ・ラグジュアリー・ナイト」、81年「夢の途中 / セーラー服と機関銃」、82年「シルエット・ロマンス」、83年「セカンド・ラブ」がヒット。現在まで発表された楽曲は1000曲におよぶ。エッセイスト、小説家としても著書多数。



ー、歌手、ミュージシャンなどなど。その際、会社側は、私の手書きの歌詞をワープロで打ち直し、それぞれに配っていることを知った。ならば、わざわざ手書きで清書する必要はないと、ワープロ文字のままプリントして、FAXで送るようになった。作詞用紙と同じように、左から読んで右に移るといふ具合に、ワープロ画面も設定した。その期間が、一番長かったかもしれない。二十一世紀に入っからは、パソコンに替わったが……。私としては、自分用に作った作詞用紙に愛着があるし、まだかなり余っている。で、そう急ぎの仕事でない場合（急ぐ時は、パソコン画面にいきなり打ち込む）、下書きに使うことにした。元は清書用だったのになあと思いがちなつかしく、ひっぱり出し。

### PAPER Q & A Vol.14

Q. 新聞のページ数は増えたのに、重く感じないのはどうしてですか?

A. 新聞用紙は約2割も軽量化。増ページに応え、省資源にも役立っています。

カラー印刷への対応も含め、急速な進歩を遂げているのが新聞用紙です。この30年間に約2割も軽くなっていることをご存知でしたか?

新聞には長年、1㎡当たり52gの重さの紙が使われていましたが、時代のニーズに合わせて、49g紙、46g紙と軽量化が進みました。さらに、新聞の多ページ化、カラー化に対応するため、軽くて強い新聞用紙が求められるようになり、今では43gの超軽量紙の使用が主流となつて



います。一部には、40gの超々軽量紙も使われています。紙の軽量化には省資源化、輸送費の節減、印刷スピードのアップなど、さまざまなメリットがあります。

今回は7月5日号、湯川れい子さんです。